

【注意】 答えはすべて、(その8)の「解答らん」に書き入れなさい。本文中の句読点や記号はすべて一字と数えます。

一次の文章は筆者が行った授業をもとに書かれたものである。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、出題に際して本文には省略および表記を一部変えたところがある。

映画やテレビや広告なんかの産業のことを「文化産業」と呼んだりします。1 産業社会にとって重要なのは、文化産業を通じて、人びとの欲望をつくり出すことなんだ。

学校で資本主義のしくみを習ったときに、「需要」ということばを教わったと思いますが、欲望というのも、一種の需要です。
a、「ご飯を食べなくちゃいけないっていうレベルの「需要」とは違う。ご飯は一応食べられているし、眠る家もあるし、寒さをしのげる服もあるけど、でももっとおいしいものが食べたい、もっとかっこいい家具が欲しい、もっとおしゃれな服が着たい、そういうのが欲望です。

だから、いちばんかわいいもの、おしゃれなもの、流行の最先端をいくもの、つまりみんなの欲望、あこがれや夢の中心の座をめぐって、産業は争うことになります。すると、商品そのものよりも、それを持ったらいかにかっこよくおしゃれなのか、という「イメージ」のほうが重要になってくるよね。それを演出するのが※メディアなんです。

産業によって欲望が生み出されるようになると、どんなことが起こると思う？ それは、ものを買う人が、自分でものを欲しがることでなくなってしまうことだ。これがかわいい、あれがおしゃれだと、欲しいものはみんな、メディアが手取り足取り教えてくれる。
b、自分ひとりでは、いったいなにが欲しいのかわからなくなってしまうんだ。

もつと言うと、メディアがみんなに「生き方」を教えてくれるということになる。こういう生き方がかっこいい、こういうものこそ価値のあるものだ——そうやって教えられてしまうと、自分で自分の生き方を考えられなくなってしまう。

c、自分では、「アレ、かわいいから欲しい！」と思っているのは自分の意志や好みだと感じていて、それがメディアによってつくられた欲望だなんて思っていない。たしかに、欲しいと思っているのは本当なんだから、これはちょっと怖いよね。でも、自分の欲しいと思っているものが、本当に「自分」の欲しいものでないとしたら、それはいったい誰が欲しがっているものなんだろうか。

実は、その答えは、「みんな」なんだ。メディアを見て、これはきつとみんなが欲しがっているものだろう、うらやましがっていると思うものを、僕たちは欲しがっている。

そういうふうに、みんなが「みんな」を意識して、「みんな」のなかに巻き込まれていく。別にかっこよくなくていいじゃん、変だっと思ってもらってもいいじゃん、っていう人がマイノリティ(少数派)になって、
2 みんながいろいろ言うのがやっぱりいいよね、という人がマジョリティ(多数派)になる。

次に、ここまで話したことを、「時間」という観点から見直してみよう。

仕事や学校が終わって家に帰ると、みんな自由な時間、プライベートな時間を過ごすよね。働いたり授業を受けたりするのは、充実感はあるけど、束縛が多かったり、つらいこともあったりする。だから、家に帰ったら好きなことをして過ごすって、楽しみにしているよね。だけど、この自由時間は、はたして本当に「自由な」時間なのかっていうのが問題なんだ。僕たちは本当に「好きなこと」をして過ごしているんだろうか。

3 産業は、この自由時間にどんな攻勢をかけてきます。この時間が、人びとの欲望を決めるからなんだ。現代では
I をする労働時間よりも、
II を生む自由時間のほうが、お金を生み出すうえでより重要なんです。だから、みんなの自由時間をどうつかまえるかということが、産業界の「ステーキ」になる。ステーキっていうのは、それをめぐって競争がおこるテーマのことを言うんだ。

このステーキを勝ち取るためには、人びとの時間をつかまえるための技術が必要とされます。そしてそれになうのは、メディアをはじめとする情報技術です。なぜかというと、テレビにしても電話にしてもコンピュータにしても、情報機器というのは、まるで水道管のように、そのなかをみんなの時間が流れていくものだからです。あるサイトにアクセスすると、その人はそのなかで自分の時間を使う。ゲームをはじめれば、そのなかで時間を過ごす。電話をかければ電話線のなかをその人の時間が流れていく。時間を使うという個人の活動が、情報機器を通して行われているんです。

視聴率競争というのも、そのために起こります。ある人がAという番組を見てくれたということは、その人のその時間を、Aという番組のなかに引き込んだということになる。しかし、別の局のBという番組を見られてしまうと、その人の時間をBという番組に奪われたことになってしまう。だから、産業の側は、情報技術のなかにいろんなしかけをつくって、みんなの時間の使

い方をコントロールしようとするんです。

眠ってさえないなければ、ある時間を過ごすということは、たいていなかを見たり聞いたりすることだ。なにかを見たり聞いたりするということは、なにかを感じたり考えたりすることでもある。つまり、時間というのは意識を生むものなんです。意識は時間の関数です。難しい言い方だけど、つまり、過ごす時間が長ければ長いほど、それだけ意識も大量に生み出されるということです。だから、産業はできるだけ多くの時間を奪おうとする。それだけ多くの意識をコントロールするチャンスがもたれるということだからね。

たとえば、一五秒間このCMを見てくださいというのは、一五秒間あなたの意識をつくり出す時間をください、ということの意味します。それによって、そのCMは、僕たちの意識にはたらきかける可能性をもつことになる。さっき話した欲望というのも意識のひとつのある方だから、欲望をもってもらえるようにと、僕たちの意識にはたらきかけてくるわけだ。

たとえば、視聴率一五パーセントのテレビドラマは、日本の人口が一億人だとすると、一五〇〇万人の人が見ている計算になる。そのドラマが一時間なら、それだけの人たちの一時間分の意識にはたらきかける可能性があるというわけです。

さて、そこで、もうひとつみんなといっしょに考えてみたいことがあるんだ。それは「市場」というものについてです。

意識にも「市場」というものがあります。きつと、みんなはもうそれがなにかわかるでしょう。答えは、「メディア」だね。

数年前にフランスで、大きな民放テレビ局の会長が、「4 私たちのテレビ番組の役割というのは、コカ・コーラに、人間の脳の時間を自由に使えるように売ることだ」と言ったことがあって、大問題になりました。一時間のテレビ番組というのは、視聴者の意識に対して一時間はたらきかけるチャンスを与えるものだったよね。だから、商売の観点から言えば、テレビ局というのは、何百万、何千万人という人の意識を、コカ・コーラのようなスポンサー企業に売っていることになるのだ、という理屈です。

何千万人も人びとの意識が売り買いされている、メディアという「意識の市場」では、人間の意識に対して値段が決められます。この時間帯の一時間番組のスポンサー料は一五〇〇万円、というふうだね。ずいぶん高いと思うかもしれないけど、もしその番組の視聴率が一五パーセントで一五〇〇万人の人が見ていたとするなら、そのスポンサー企業は視聴者一人の意識を、一時間当たりわずか一円で買い上げていることになる。

そうして、メディアの市場で意識を買い取るとは、実際の品物の市場での取引に重要な効果を及ぼします。たとえば、コカ・コーラが清涼飲料を販売するときに、実際の清涼飲料の市場だけでペプシコーラやサントリーやキリンと競争するよりも、まず「意識の市場」で人びとの意識を買い取って、コカ・コーラゼロはこんなに素敵な飲み物で、これを飲む人はスリムでかっこいいんだ、っていうイメージをもってもらったほうが、ずっと効果的なんだ。だから、意識の市場は、他の市場の動向を左右する「上位の市場」の役目を果たすようになる。メディアというのは、人びとの意識にはたらきかける経済の活動でもあるんだ。

さて、そろそろ心配になってきた人もいるんじゃないかな。自分が見てきたテレビ番組はすべて、産業にとって都合のいいように自分の意識をコントロールするためのものだったのか。いままで見たテレビ番組にも気に入ったものはあったし、テレビコマーシャルにもおもしろいつて思えるものがたくさんあったのに、そういうのも全部だめなんだろうか。

そういったもつともな疑問については、僕は、産業や資本主義やメディアが全部だめだというふうには考えていない。そのことだけは、ここで先取りして言っておきたいと思います。

(石田英敬『自分と未来のつくり方』より)

※ メディア：テレビ・ラジオ・新聞などの情報を伝える仲介(ちゆうかい)役となるもの。

問一

a	c
---	---

 に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|---|-----|---|------|-----|-----|---|------|---|-----|
| ア a | でも | b | つまり | c | あるいは | イ a | だけど | b | ただし | c | しかも |
| ウ a | つまり | b | しかも | c | それで | エ a | だから | b | なぜなら | c | つまり |
| オ a | でも | b | だから | c | しかも | | | | | | |

問二 — 線1「産業社会にとって重要なのは、文化産業を通じて、人びとの欲望をつくり出すこと」とあるが、ここでの「欲望」の説明として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 実際に買うことはできないだろうと思いがちでも、メディアが作り出す商品を何となく欲しいと思う欲望。
イ メディアとの関わりは別として、生きていく上で絶対に欠かせない必需品だけは手に入れたと思う欲望。
ウ 本当は好みでないものなのだが、メディアの演出によって好きなような気がして欲しくなってしまう欲望。
エ 自分の意志で欲しいと思いついてるが、実際はメディアに乗せられて欲しいと思ってしまう欲望。
オ 最初は自分の意志などないが、メディアの助けによって自分の意志で欲しいと決められるようになる欲望。

問三 — 線2 「みんながいいって言うのがやっぱりいいよね」とあるが、こうした思いと同じ例として適当なものを次の中からすべて選び、記号で答えなさい。

ア 若い女性読者に人気のある雑誌の流行服の特集を見ていて、自分にも似合いそうでいいなあと思う。
 イ 終戦直後の物資の不足した時代の話を読んで、古い物を大切に使うことはやはりいいなあと思う。
 ウ 海にたくさん島が浮かぶ松島は昔から名所として有名だが、海のある景色は美しくいいなあと思う。
 エ CMでよく宣伝されているI社の風邪薬は評判が高いので、一番効き目がありそうでいいなあと思う。
 オ 最近よく見る売れっ子芸能人のファッションは、中高生たちのうわさにのぼるだけであっていいなあと思う。

問四 —

I	と	II
---	---	----

 には対義語になる言葉が入る。それぞれに入る最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 模倣 イ 利益 ウ 消費 エ 創造 オ 損失 カ 生産

問五 — 線3 「産業は、この自由時間にどんな攻勢をかけてきます」とあるが、「産業」が「攻勢」をかける目的は何か。「攻勢」をかける方法も含め、本文中の言葉を用いて五十字以内で説明しなさい。

問六 — 線4 「私たちのテレビ番組の役割というのは、コカ・コーラに、人間の脳の時間を自由に使えるように売ることだ」とあるが、それは、「テレビ局」と「コカ・コーラ」のどのような関わり方を言っているのか。その説明として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「テレビ局」は、番組の高い視聴率を得るために、実際の品物の市場で利益を得ている「コカ・コーラ」から視聴者の意識を買っているということ。

イ 「テレビ局」は、「コカ・コーラ」から高いスポンサー料をもらって視聴者の意識を自由にコントロールして、番組の視聴率をさらに上げているということ。

ウ 「テレビ局」は、「コカ・コーラ」が実際の品物の市場でもわかるように、視聴者の意識をコントロールする機会を「コカ・コーラ」にお金で売っているということ。

エ 「テレビ局」は、視聴者の意識を自由にコントロールするチャンスで「コカ・コーラ」から買い取り、視聴率を上げて「コカ・コーラ」の知名度を上げているということ。

オ 「テレビ局」は、「コカ・コーラ」の売り上げに応じてスポンサー料を取り、代わりに視聴者の意識をコントロールできるチャンスを「コカ・コーラ」に与えているということ。

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、出題に際して本文には省略および表記を一部変えたところがある。

鳥海浩次は中学二年生。父親の仕事の都合で、東京から瀬戸内の小さな島・瀬戸島に山村留学している。同級生の今井花香も山村留学生である。花香は水泳のオリンピック候補選手として将来を期待されていたが、怪我のために今では泳ぐことから遠ざかっている。次の場面は、ある日の放課後の出来事である。

二年生のクラスは、僕と今井花香がいなかったら三人。三学年合わせても十四人しかない。廃校になるという噂はずいぶん前から流れているらしい。僕たち瀬戸島への山村留学生に期待される役目は一つしかない。水増しだ。

それはともかく、人が少ないからちよつと動いただけでも目立ってしまうのには困る。だから、花香と話をするのに、放課後まで待たなければならなかった。咳払いをして席に近づくと、いきなり彼女の方から話しかけてくる。

「鳥海、本当に泳げるの」

僕はぎよつとして足を止めた。

「何だよ、いきなり」

「この前、大変だったじゃない」

この前——一週間前、僕たちは※水軍の沈没船を探しに海へ出た。潜っていた僕は大潮に巻きこまれて、危うく溺れかけたのだ。

「あんまり自信はないな。泳ぐの、好きじゃないし。お前とは違うよ」

一瞬、間が空く。花香は僕の顔を見もしないで訊ねた。

「あの沈没船、どうするの？ また探しに行く？」

「ああ。でも、計画を練り直さないとね」あんな目に遭うのはもうごめんだ。何か上手い方法があるはずだし、それを考える時間だけはたっぷりある。

「少し泳ぐ練習した方がいいわよ。今度、村営のプールもできるでしょう」

まさか、彼女の方からこの話を持ち出してくるとは。僕は椅子を引いて彼女の横に座った。あまりくつき過ぎないように。

「その件なだけどさ」

「その件って？」花香が耳の上の髪をかきあげる。

「だから、村営プールの話」

「それがどうかしたの」

花香は下を向いたまま、かばんに教科書とノートを詰めこみ続けている。急に空気が冷えるのを僕ははつきり感じた。

「いや、関係あるとかないとかじゃなくてさ」花香の突っ張った態度にはいつもどぎまぎさせられるけど、ここで引いちゃいけない。

僕は坂本先生——坂ちゃん——の情けない顔を思い出し、喉の奥に引っこんでいきそうな言葉を無理矢理引っぱり出した。

「一週間後にプール開きなんだ」

「へえ、そうなんだ」関心なさそうに花香が相槌を打つ。1とうに荷物は詰め終わっているのに、まだかばんの中に手を突っこんで何かをいじっていた。

「お前さ、あそこで泳ぐ気……ない？」

「何、それ」

ようやく花香が顔を上げる。冷房のない教室にいと汗ばむほどののに、彼女の冷たい表情は僕を凍りつかせた。

「だから」素っ気ない花香の反応に負けまいと、僕は右手で左の手首をぎゅっと握り締めた。「プール開きだよ。ほら、最初だから何でも派手にやらないと」

「あんた、何でそんなこと言ってるの」

「え？」

「誰かに頼まれたんでしよう。もしかしたら、坂本先生？」

「いや、まあ……」僕は口をつぐんだ。

坂ちゃんに頼まれたのは事実だ。一週間後に行われるプール開きで、ジュニア記録保持者の花香に泳いで欲しい。これは島の人たちの願いなんだ、と。どうやら坂ちゃんは花香が苦手なようだ。それで説得役を僕に押しつけてきたわけで、呆れながらも結局引き受けてしまった。何だか坂ちゃんが可哀相だったから。

「お前が泳げば、みんな喜ぶと思うけどなあ。一流選手を呼ぶのは大変だろうけど、お前がいるからラッキーだし」

「あんた、馬鹿じゃない？」

花香が、椅子を蹴倒しそうな勢いで立ち上がる。慌て僕も立ち上がり、一步後ろに下がった。でも、口は閉じない。意地でも。

「お前、毎日つまらないって言ってたじゃないか。だから沈没船の話だって乗ってきたんだろう？ みんなをびっくりさせてやればいいじゃないかよ」僕は上体を前に倒して、クロールの真似をしてやった。「お前が泳ぐのを見たら、みんな驚くよ。何しろ、将来のオリンピック候補——」

リンピック候補——

いきなり、頭に衝撃を感じた。慌てて顔を上げると、分厚い国語の教科書を右手に持って、花香が仁王立ちしている。チクシヨウ、たぶん角で殴った。

「痛え……」

「今度そんなこと言ったら殺すからね」

「殺すって、お前」笑い飛ばそうとしたが、彼女の真剣な表情を見た途端に笑顔も言葉も引っこんだ。

「殺すからね」

低い声で繰り返して、花香が大腿に教室を出て行った。古びた木の廊下がざしざしと音をたてる。

さりげなくいこう。花香には、むきになっていると思われるくない。だからいつも通りのパターンを守ることにして、2一度家に戻って本を取ってきた。最近僕は、帰るとすぐに、本と携帯用のCDプレイヤーを持って自転車をこぎ出すことにしている。行き先は瀬戸内海に面した瀬戸北港近くの堤防。ここで好きな曲を聴きながら、陽が落ちるまで本を読むのが最高の——この島では、という意味だけ——暇つぶしだ。

ここには、花香もよく姿を見せる。何をするわけでもなく、堤防の上に座ってぼんやりと海を眺めているだけだけど。今日も、上手くいけば会えるかもしれない。そうしたらまた話してみよう。会えなかったら——ま、僕には※トーマス・マンがついてるし。東京

から瀬戸島へ来る時にダンボール箱一杯に詰めこんできた本の中でも、まだ手をつけていなかった「魔の山」。花香に会えなくても、こいつが慰めてくれるだろう。

いた。花香はいつものジャージ姿で、堤防の上で膝を抱えている。短い髪が熱い海風にそよぐ。いきなり話しかけると逃げ出すかもしれないと思い、まずはこちらの存在を知らせるために、盛大な音を立てて自転車のブレーキをかけてやった。あっさり無視される。

「今井」

呼びかけにも答えない。堤防の上にぺたりと座りこんで左足を伸ばし、右膝を両手で抱えている。階段を上がり、彼女から三メートルほど離れたところに腰を下ろした。

「怒ってんのか、今井」

「当然」僕の方を見もしないで、花香が素っ気なく答える。

「それって、ひどくないか」

「どうして」

横顔しか見えない。だが、花香の目が燃えるように光っているのは分かった。

「何か気に食わないことがあるのはお前の勝手だけだし、理由を教えてもらわないとこっちだって困るよ。何だか、俺だけ空回りして馬鹿みたいじゃん」

「そういうの、お節介って言うのよ。あんただって、人に知られたくないことはあるでしょう」

「そりゃあ、まあ」

「とにかく、私は話したくないの」

「何だよ、B 堂々巡りか」

僕は「魔の山」をコンクリートの上に置いて立ち上がり、思い切り伸びをした。生臭い潮の臭いがC 鼻を刺す。この島に来てほぼ四か月が経つのに、この臭いにはまだ慣れない。たぶん好きになれないまま、島での生活は終わるだろう。

「なあ、今井、泳ぐのを見せてやれよ。みんな楽しみにしてるんだぜ」

「みんなって、誰よ」

「だから、この島の人たち」僕は両手をぐるりと回して見せた。

「やだなあ、そういうの」花香が盛大に溜息をついた。「あんただって、この島が嫌いなんですよ。ここで暮らすの、退屈で仕方ないでしょう？ だから暇潰しに沈没船なんか探しに行ったんだし」

「それとこれとは関係ないじゃないか。だいたいお前こそ、何でこの島にいるんだよ」僕はさっと唇を舐めた。話は核心に入りつつある。「怪我のせいなのか？」

「怪我って何よ」花香がそっぽを向いた。

「膝の怪我が治ってないって、自分で言ったじゃん」僕が溺れかけた時のことだ。

「あんたに関係ないでしょう。それとも、そんなに私のことを知りたいわけ？」花香が立ち上がり、僕と向き合った。「もしかしたら、あんたも悩みを話して、私に同情してもらいたいとか」

「お前に同情してもらうほど落ちぶれてないよ」さすがにむっとして言い返した。理由は分からないけど、父親に体よく東京から追い出されたこと。僕なりの事情はそれぐらいだが、花香に打ち明けるつもりなんかない。

「私は話したくないんだから、余計なことは訊かないのが礼儀よ。それともあんたも、3 すっかりこの島の人になっちゃったの？」

「何だよ、それ」

「すぐに首を突っこんでくる。お節介ばかりしてる。※計みたいに」

「あいつと一緒にするなよ」怒りが喉元まで這い上がってきた。

「やっぱりあんたも計が嫌いなんだ」

いい加減頭に来た。どうして花香はこんなに頑なになるんだろう。

「そんなこと言っていない」

「とにかくあんたは、お節介焼き過ぎなの。放っておいて、お願いだから」花香がD 踵を返して階段の方に向かった。

「いい加減にしろよ。さっきから勝手なことばかり言ってるさ。俺だってお前のこと、心配してるんだぜ」僕はほとんど怒鳴っていた。

「怪我が治ってないって言ったって、ちゃんと歩いてるじゃないか。どこも悪そうに見えないんだけど。仮病なのか？」

「みんなと同じこと言うんだね」

みんなって誰だ？ 訊こうとした瞬間、花香が振り向く。その眼にはうつすらと涙が浮かんでいた。4 口が渇き、鼓動が早くなる。何時間にも思える時間が過ぎた頃、花香がふっと横を向き、階段に向かって歩き出した。僕はその場に立ち尽くしたまま、しわがれた声で呼びかける。

「今井」

花香はもう振り返らなかった。やってしまった。決定的だ。水泳選手らしく幅の広い彼女の肩が、怒りで盛り上がっている。

(堂場瞬一『少年の輝く海』より)

※水軍の沈没船……島には財宝をつんだ船が沈没しているという伝説があり、浩次たちはその沈没船を探している。

※トーマス・マン……ドイツ生まれの小説家。

※計……浩次と花香の同級生。島の少年。

問一——線A「仁王立ち」・B「堂々巡り」・D「踵を返して」の本文中の意味として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

A「仁王立ち」ア 王様のようにはいばり散らして立つこと イ いかめしく足を広げてどっしりと立つこと

ウ 片手をあげて今にも殴りかかりそうに立つこと エ 悲しみにくれてぼんやりと力なく立つこと

オ 背筋を伸ばして直立不動の姿勢で立つこと

B「堂々巡り」ア 強情な態度で反対意見を繰り返すこと イ 秘密を決して打ち明けないこと

ウ 相手を軽蔑して取り合わないこと エ 議論が繰り返されて進展しないこと

オ 差しさわりのないように取りつくろうこと

D「踵を返して」ア 相手の返事も待たず急ぎ足で イ うなだれながら重い足取りで

ウ くるりと方向転換をして エ 急に態度を変えて懇願しながら

オ 怒りのあまり激しく言い返して

問二——線C「鼻を刺す」について、次の各問に答えなさい。

①「鼻を刺す」と同じ意味を持つ慣用句を後の【選択肢】から一つ選び、記号で答えなさい。

②次のa～fの場面で使うのにふさわしい慣用句を後の【選択肢】から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を使わないこと。

a 市川君はお兄ちゃんと二人で、とても小さな子供部屋を使っている。

b 市川さんはお母さんが隠しても、大好きなお菓子の隠し場所がすぐわかる。

c 愛犬のタローは、飼い主の市川さんにいつも甘えてくる。

d お兄ちゃんは、年の離れた弟の市川君をばかにしてまったく相手にしてくれない。

e 市川君は運動会の徒競走で一番になったので、いばって言いふらしている。

f 市川さんはこっそりテスト勉強をして、ライバルの市川君をだしぬいた。

【選択肢】

ア 鼻を鳴らす イ 鼻を突く ウ 鼻が高い エ 鼻を突き合わせる オ 鼻をぬぐう

カ 鼻も引つ掛けない キ 鼻を明かす ク 鼻が利く ケ 鼻をつまむ コ 鼻に掛ける

問三——線1「とうに荷物は詰め終わっているのに、まだかばんの中に手を突っこんで何かをいじっていた」とあるが、ここでの花香の心情の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 村営プールの話に以前から興味があったので、浩次が知っていることを聞きだそうと、さりげなく話の続きを待っている。

イ 浩次に対する好意から、水泳の練習に付き合うと提案したのに、浩次に泳ぐのは好きではないと言われがっかりしている。

ウ 沈没船を引き上げるための新しい計画を立てることに気を取られて、浩次の話が耳に入らなくなってしまうっている。

エ 浩次との話の成り行きが少しは気になるが、花香自身の水泳の話題は避けたいので浩次と目をあわせないようにしている。

オ 泳ぐことが嫌いと言われ、急に浩次に対する関心を失ったが、沈没船の話にはまだ興味があるので話の続きを待っている。

L 2 3-1

「解答らん」

注意 上の*のらんには、何も書かないこと

*

*

*

*

*

*

*

*

*

問六	問五			問四	問三	問二		問一
						②	①	A
						a		
						b		B
						c		D
						d		
						e		
						f		

問六	問五			問四	問三	問二		問一
						②	①	A
						a		
						b		B
						c		D
						d		
						e		
						f		

⑤	①
⑥	②
つ	
⑦	③
む	
⑧	④
かな	